

柄谷 友香 名城大学准教授に聞く 震災からの復旧・復興と 土木技術者の役割

聞き手 加藤 佳孝 東京理科大学准教授
(建設マネジメント技術編集委員会委員長)



入院中に阪神・淡路大震災で被災，
その経験がその後の研究テーマに

○加藤

本日は大変お忙しい中、お越しいただいてありがとうございます。

柄谷先生は、この度の震災後に被災地を回られ、現在は陸前高田市の仮設住宅で被災者の方々と一緒に生活をされ、被災者の自立・生活再建を支援しながら研究活動が続けいらっしゃるそうですが、ご自身も阪神・淡路大震災で被災され

たとお聞きしております。

そこで、まず初めに、柄谷先生が防災関係に携わろうと思われた、そもそものきっかけをお聞かせいただけますか。それにはご自身が体験された神戸の震災が少なからず影響しているのでしょうか。

○柄谷

今考えればそうなのかなと思います。ちょうど神戸で震災が起こったとき、私は病気を患って入院していたのです。私が寝ているベッドなどもこわれるような状況で、病院の現場も相当混乱していました。私はそれまで病気を患っている自分が

一番不幸だと考えていたのですが、病院の窓から見える光景はそれはひどい状況で、自分でも何かできないかなど考えるようになったのです。それで、入院患者でありながら看護師さんたちのお手伝いをしたり、透析の患者さんに付き添ったりと、無意識にそういうことをするようになっていたのです。

大学院に行くときも、私自身被災して、被災地にいたのに何もできなかったという思いがどこかにあったので、いつか何かの形でいろいろお世話になった方々に、研究を通して恩返ししたいという気持ちがありました。

○加藤

大学院での博士（課程）の研究テーマは、具体的にはどのような内容だったのですか。

○柄谷

被災された方々や被災地域の復興、生活再建のプロセスというものを定量化するというのが私の博士論文だったのですが、やはり「人」を対象とした研究です。土木にしても防災にしても、当時は、被災された方々に対して何かアプローチするということが少なかったので、私はそうした研究がやりたかったのです。

ただ、社会科学的なアプローチのみでは復興プロセスを客観的に捉えることが難しいこともあって、まずは定量化だとなったのです。一つは、神戸の震災後、地域の経済や商業、あるいは港湾などを原形復旧してきたわけですが、それに伴ういろいろな社会経済統計指標を見たときに、インフラはもとに戻っているけれど、その後の使われ方とか、例えば港湾の輸出入などが韓国などに取られているわけです。そうしたときに、本当に神戸の港を原形復旧したことがよかったのかということを検証するということです。

もう一つは、被災された神戸市民の皆さんが生活を再建していくのに5年、10年とかけていったときに、何が自分たちの再建のよりどころになったのかということワークショップなどを通じて、その中からいろいろな要因を導いていく。それを、社会調査をして生活再建状況を測るといっ

た研究をしました。つまり、インフラの整備による効果と、それに伴う被災者の方々の生活再建、その二つについて定量化するというのが私の博士論文です。

○加藤

博士論文の対象は神戸の震災ということですが、そのときに「人」という切り口というのは、とても土木らしいと思いますね。私はそもそもそこが土木だと思うのです。論文の研究の前後で発見や気づいたことがあれば、お話ししたいのですが。

○柄谷

生活を再建する中で、大体2年、3年、5年ぐらいまでは、やはり住まいが一番大きな懸案事項なのです。避難所や仮設住宅にいるうちは、やはり被災者だということから脱していないという思いがあるわけです。5年目にいろいろとお話を伺ったときに、1番はやはりまだ住まい。2番目に、人と人とのつながりというファクターが浮上してくるのです。それが、9年、10年という時期の検証になると、人と人とのつながりが1番になっているわけです。当然のことかもしれませんが、被災された方々がもとの状況、もしくはもとよりもいい、新しい環境を築いていく上で、時間に則して、どうすれば自分たちが被災者じゃないと思えるようになるのかというところは変化してくる。そこは、今回の東日本大震災でも見ていかなければいけないと思っています。

○加藤

自分が被災者じゃないと思えるようになるというのは、私にはかなり難しいことのように思えますが、被災した方々は、時間が経てば日常生活を送る上で自分が被災したということを感じないようになれるものなのですか。神戸の震災をずっと調査、研究してこられて、そうした点はどうお感じですか。

被災者をひとくくりに捉えるのではなく 細かく検証することで真に必要な支援が 見えてくる

○柄谷

これも興味深い点なのですが、被災者と一口に言っても、時間とともにいろいろな層が出てくるのです。被災した方々が役所に相談に行く回数と内容を観察してみると、最小限のことだけを相談しにきて、早々と自立していく人たちが相当数いらっしゃるのです。被災からの自立が早い層で、1年経たないうちにそうした人たちが出てきます。一方で、いつまでも役所の人たちに何かやっ



名城大学 都市情報学部 准教授

柄谷 友香（からたに ゆか）氏

兵庫県出身。京都大学大学院工学研究科博士課程修了。博士（工学）。京都大学防災研究所助手、財団法人阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター専任研究員、京都大学大学院工学研究科助手を経て、名城大学都市情報学部助教授、2007年から現職。内閣府中央防災会議専門委員、地域安全学会理事などを務める。専門は都市防災計画。

てほしい、もしくは特別な支援を必要とする方々もいらっしゃる。そうした方々は、17年たってもまだ阪神・淡路大震災の被災者という意識が強いのです。

さらに、それらの中間層のような方々もいらっしゃる。そうした方々は住まいも確保できないし、復興住宅のようなところに入っておられずから、どうしても被災者同士が集まっているために、なかなか被災者としての気持ちが抜けにくいのです。

もちろん被災された方々の心の傷というのはなかなか癒えないのかもしれませんが、ひとくくりに被災者として見るのではなく、もう少し細かく分けて見てさしあげる必要があると思うのです。そうすることによって、行政の人たちは大変な状況の中で、本来の仕事を全うできるようになるのです。初めは被災された方々にくまなくサービス提供が必要ですが、時間の経過とともに、自立しようとしている層には直後ほど手を掛けなくてもいい（自立に向けたサポートへの移行）、ということを経営と一緒に検証できたことが非常に興味深かったかなと思います。

○加藤

ただ、その分類をしていく判断は非常に難しいですね。

○柄谷

難しいですね。難しいですけども、自立している層の方というのは、客観的に見てもはっきり分かります。今回の震災でもそうですけれど、自分たちで次の住まいや次の仕事を見つけて被災地を後にするという方も相当数いらっしゃるのです。いいかどうかは別ですけども、そうした方々の自立のおかげで、行政は真に必要な方々にサービスを提供できるようになる。そういう意味では、被災地にある限られた力の再分配といえますか、すごくありがたい現象かなと思いますね。

○加藤

柄谷先生は、阪神・淡路やその後の中越など、災害のときには現地に行かれて、実際に被災された方々と触れ合いながらずっと調査、研究をされ

ているのですか。

○柄谷

神戸、インドネシア、タイなどでは、もちろん被災地には伺うのですが、復旧・復興の段階になったときに調査に行って聞き取りをしたり、行政の人たちの支援をするというスタイルだったので、今回の東日本のように、地元の皆さんと一緒に仮設住宅や避難所で生活するということは、これまではなかったことです。今回はこれまでとは違って、一番現場に近い、それも行政側ではなく被災者の方に近い入り方をしています。

住民と行政を議論のテーブルにもっていき、土木工学にいる者だからこそ、それができる

○加藤

これまで数多くの防災の現場に関わってこれたと思うのですが、ご苦労されたこととか貴重な体験をされた現場などはおありですか。

○柄谷

そうですね、数年ほど前から水害、ゲリラ豪雨というものが頻発し始めたので、河川や水害に関わる機会が一気に増えました。今につながるものの一つとして、それまで取り組んだことのない仕事も始めました。鹿児島なのですけれども、そこにご縁があったのはすごく大きかったですね。

ある流域で水害があって、上流で降った雨がダムを抜けて下流の町まであふれたとき、その住民は、ダムによる人災だというわけですね。操作を誤ったんじゃないかと。住民は訴訟を起こそうとしていたのです。しかしながら、結果としては住民たち自らが訴訟を取り下げたのです。

その過程で大変興味深かったことは、責められる側の河川管理者たちも、土木の構造物の知識や、全体評価するという考え方、公共工事の進め方、お金の出どころなどについて、住民の方々が疑問に思うことに分かりやすく答えて、ともすれば敵対しようとしている人たちの手を結びながら、水害に強い「かわまちづくり」を進めていく

ことでした。

国、県、市町、住民がまじめに河川流域やダムの構造の話をするすることで、ダムの持っている機能と、その限界を理解していく。さらに、目の前にあるダムや水門、堤防だけではなく、流域全体を見た上でそれぞれがどういうふうに機能しているかを理解する、そうしたことを5年かけてやってこられたのです。

今ではその地域は「かわまちづくり」の先進事例として全国でも注目されるようになっていて、地域の人たちに、ダムや河川のことが知識・知恵として浸透しているのです。国の河川管理者の方も、今回のダム操作やこれまでの河川整備は操作規定に則ってきちんとやったんだと、最初はその説明の繰り返しだったのですが、住民とともに



東京理科大学 理工学部 准教授

加藤 佳孝（かとう よしたか）氏

静岡県出身。東京大学工学部土木工学科卒業。博士（工学）。東京大学生産技術研究所助手、国土交通省国土技術政策総合研究所研究官、東京大学生産技術研究所講師、アジア工科大学院客員講師、東京大学生産技術研究所准教授を経て、2011年から現職。専門はコンクリート工学、建設材料マネジメント。



に彼らも変わっていったのではないのでしょうか。

そこから見えてきたのは、知識、知恵が揃って同じ立場になったとき、初めて両者が議論できる素地ができるのです。この合意形成、リスクコミュニケーションのプロセスは私にとって、とても貴重な経験をさせていただいたと思います。

○加藤

住民説明とか合意形成とか、そういったフィールドの話ということですね。

○柄谷

そうです。私は、議論するためには共通の知識とか知恵というものがあって、そこでやっとテーブルに着けると思っているのですが、そのテーブルに持っていくまでがすごく興味深くて、こうした役割は土木工学にいる者だからこそできることではないかと考えています。

土木・防災研究者として被災現場を見る そして謙虚に、すべてを吸収して学ぶ

○加藤

そうした経験は、今回の東日本大震災への関わり方にも少なからず影響しているのではないかと。そもそも今回の東日本大震災に関わり始めたきっかけというのは、どういったところにあったのですか。

○柄谷

きっかけとしては、ちょうどあのときは中部地方整備局さんで広域避難のあり方について検討しており、その議論の真っ最中にあの揺れを感じました。そしていろいろと考えたのですが、一つは、今回の災害というのが超大規模で広域にわたるだろうということは報道等も見てわかってきて、そのときに何を見ようかなと思ったのです。それは5年、10年越しの研究になるのは確かだと。

おそらくこれから被害がさらに広がって、私たちがこれまでインドネシアも含めて経験したことのない未曾有の災害であれば、とにかく最初から最後まで全部それを学ばせていただくという気持ちで現場に行くべきではないかと思ったのです。

もう一つは、激震地の迷惑にならないようにするにはどうすればいいかということです。これだけ広域になると、日本海側や中部、九州など、全国からの広域支援があると思いましたが、とりあえず日本海側から、被害のないところをずっとたどって行って、状況を見ようと考えたのです。そういう意味では、復旧状況に合わせて、被災地に迷惑をかけない入り方を考えるのも、やはり防災研究者のやるべき仕事だと思いましたので、3月13日から、山形、秋田、青森へと北上して行ったのです。

○加藤

初めから1人で行こうと思われたのですか。

○柄谷

1人で行こうとは思っていなかったのですが、発災直後は研究者はみな「ちょっと待て、大きすぎる」という感じで、静かに考える段階だったと思うのです。私としてもだれかに「行ってみよう」と言えるほどの確たるものがあってもなかったので、それで1人で行くことにしました。でも、初めから研究者ですと言って入って行くつもりはなかったので、1人で行ったことが結果的にはよかったですね。

八戸市に入らず、役所には行かずに、ボランティアセンターがどうなっているかを見に行っ

たのです。当然、行って見て写真を撮るということとはできないので、じゃあちょっと働いてみようかなと思ひまして。「外部の人はちょっと…」と断られるかなと思ったら、「どうぞ、どうぞ。いっぱい仕事はありますから」と言われて、すぐに働き始めたのです。

仕事をすると思所にも行きますので、役所の混乱であるとか、地元の被災状況であるとか、外部の支援の状況であるとか、そういうものを身近に見ることができました。純粋なボランティアではないのですけれど、いろいろなことをくまなく見るためには、ボランティアという立場はすごくよかったのです。

ですから、八戸市、久慈市や、宮古市の田老などは基本的にはボランティアのような形で仕事をしながら、それ以外の時間は自分で歩いて見ていたというのが、そのときのやり方ですね。

○加藤

ずっとそうした形で、比較的すんなりと南下してこられたのですか。

○柄谷

すんなりと南下できればよかったのですけれども、盛岡市から「くしの歯」で沿岸部に出ていくところが難しかったですね。雪も深かったですし。ただ、意外なことにバスが結構動いていたのです。盛岡市ではホテルを拠点にして、そこからバスでまず宮古市に入りました。宮古市の田老湾は万里の長城と言われるくらい防災対策構造物で固めたところですので、見ておきたかったです。

ただ、あのときのことはどう表現すればいいのか。堤防の上に座って、すごく静かな被災地なのです。自衛隊、警察が搜索をなさっていて、マスコミも研究者もいない静かな状況で、ずっとその以前の状況を思い浮かべながら座っているときのやりきれなさ。土木という仕事をやっている、土木の一端にいるということ、それと、防災の研究をやっていますとこれまで言ってきた自分がいて、今まで住んでいた方たちの家屋もなければ、その方たちだって生きているかどうか分からない



という光景を目の当たりにして、構造物が非常に無残に壊れている、あのときの田老の光景。

あのときの気持ちは二択だったのです。一つは、もう研究をやめようかなというような気持ち。私は今まで何をしてきたのだらうと、そうした思いですね。それと、それでも前向きにやらなきゃいけないという気持ち。そこを、ずっと座って考えていたのです。そして思ったのは、自分たちがやってきたことをどう評価するかよりも先に、まず、こうなってしまったことに対してものすごく謙虚に現場に入らせていただくこと。そこですべてのことを吸収して、いろいろなことを教えていただき、それをこの被災地もしくは今後の、将来の地震や災害に貪欲に生かすこと。それが私に今できることだということです。それからもう迷うこともなくなり、被災地に2週間いて、一度大学に帰って、2～3日仕事を整理したらまた被災地に行って10日いて、というように行って帰ってを繰り返していました。

東日本大震災で見えてきた新しい問題を今後どのように生かしていくかが最大の課題

○加藤

陸前高田市に行かれたのは、4月に入ってからですか。

○ 柄谷

陸前高田市は壊滅的な被害でしたので、少し時間をかけて 4 月に入りました。そこのボランティアセンターに行って、事情も説明して。ボランティアセンターの方も、すごく相談に乗ってくれて、いろいろ協力をしてもらいました。

避難所でお手伝いしたいと申し出て紹介されたのが、ある公民館なのですけれども、そこの人たちに「明日も来てくれる？」と言われたのがきっかけで帰れなくなってしまって、いまだにそこにいた人たちの仮設住宅でみんなと一緒に過ごしているのです。被災者の方や、支援している地元の方たちとすごく仲よくなって。もちろん当時はわざわざ自分が大学の研究者であるとは言わないのですけれども、それがきっかけで、それ以降は陸前高田市に絞って被災地の状況を見ていくことにしたのです。

○ 加藤

それまでずっと防災の研究をなさっていて、現場にも行かれた経験があまりで、しかも神戸も経験されている、そういう方が東日本の現地に行かれて、ある程度想定できるような状況だったのか、あるいは全く想定できない部分があったのか、そのあたりはいかがですか。

○ 柄谷

全く想定できない部分がありました。特にこれまでの経験による仮説はいったん置いておこうと考えると、いろいろなことが見えてくるのです。確かに被災状況、例えば役所の方の 2 割が亡くな



壊滅的な被害を受けた陸前高田市役所

っているといった状況は、戦後私たちは経験したことがないわけです。そういう意味では、役所や行政が、必死になって皆さんやっているのですが、やはり被災された方が多過ぎて対応しきれない。

今回の災害で、これまでの災害と全く違うなと思ったのは、これまでは行政が被災された方々を支援する、被災された方々は行政もしくは外部の支援者に支援してもらう、という図式があったのですが、今回はそれができないと強く感じたのです。それがこれまでとは最も違うことでした。

そうした状況で何が起るかということ、最初は皆さん、役所が来ない、それから、避難所にいるけれども、指定避難所じゃないところに逃げているから物資が来ない。皆さんすごく不安に感じている中で、自分たちはこれからどういう支援が受けられるんだろうということを言い始めるわけですね。

ですけれども、時間とともにその避難所の中で少し役割分担ができてきて、リーダー的な人もいれば、文句を言う人をなだめる人もいる。ご飯をつくる人もいれば、子供の世話をする人がいて、おばあちゃんの面倒を見る子供たちも出てくるという形で、何となくやんわりと役割分担ができてくる。そして、自分たちでやらないと今回はだれも何もやってくれないという気持ちに変わっていくのです。

そうしたことを実際に見て、役所の人たちにそうした状況を伝えると、すごく助かるというのです。自分たちは行きたいけれども、とても手が回らない。そういう歯がゆい状況だから、避難所の方が自活してくれるのはすごくありがたいと。私はその間にいて、被災した方たちが自分たちで役割を持って、自分たちでやれることがある。そういう、ある意味での被災地の中での役割をそれぞれ担っていくというのはすごく重要なことだと思ったのです。仮設住宅に移った今も同じようなことが起こっているのですけれども、被災された方たちが、もっと大変な人を支援していく立場になる、役割が決まっていく。それが地域の再建に

向かっていい動きになっているのではないかと思っています。

一方で想定内と言いますか、これまでも起こってきたことも確かにあります。よく、災害が起こったときには、こんなの初めてだ、こんなの経験したことがないと皆さん言いますね。ですけれども、当然初めての経験ではあるのですが、傍から見ていると、避難所の中で出てくる課題、例えばトイレの問題や、女性のプライバシーの問題、特別な手助けが必要な要援護者の方々への支援などは、これまでの災害の中で見えてきたことだと思うのです。

ただ、それがなかなか生かされていないのです。いえ、生かされないというより、一つ一つに対応すべき量が多すぎてできない。ですから、例えば役所の方に、ちょっと先の課題として、こんな問題も出てきますよと言ってさしあげられるのが、多分、私たち研究者もそうですし、かつて起こった災害を知っている者の役割かなと思いつながら、そういうことを言わせていただいたところもあります。

私としては、今回の災害の新しさというものをどういう形で出せるかというのが課題だと考えています。おそらく研究者としては、土木だけ、技術とかそういう意味だけではなくて、私たち、こういう時代にいる研究者が、この経験の中で何が新しいのかを知って、それを生かして技術を発展させたり、あるいは仕組みや制度などを変えていくということが、とても重要になるでしょうし、私もそこだけはいつも中心に据えておきたいと思っています。

○加藤

被災された方々は、避難所と仮設住宅では全く変わるものですか。

○柄谷

今回の災害は、私たちが経験するには余りに大きかったわけです。町もなくなり、例えば陸前高田市だけを見ても、約 1 割弱の方が犠牲になられている。そうした状況の中で、避難所にいるときは、みな被災した方たちだったのです。ですか

ら、これまでの災害と比べても、皆さんあまり不平不満を言うというよりは、みんなでいることによって何か落ちつくといえますか、同じ経験をした人たちが集まってきた、そういうような雰囲気はまだあったというのと、避難所のときは、もともとのコミュニティに近い人たちがいる、顔の見える関係があるということもあって、最初は大変でしたけれども、食料とか救援物資が届き始めると、割と皆さんおだやかに過ごせるようになっていったのです。

それと避難所で皆さんが口癖のように言っていたのが、「みんな同じだから」。役所の人に対しても、「あの人たちもみんな被災者だから」が合言葉だったのです。そういうこともあって、割と避難所というのは、大変な中でも皆さん何となく力を合わせてやってきたわけです。

ところが仮設住宅に移ると、新しい問題が出てくるのです。少しでもいいからプライバシーを守ってもらえる家が欲しい、空間が欲しいと言っていたのですが、いざ移ってみると、狭い。狭い上に隣は長屋でくっついている。それと、もともとのコミュニティの人たちが分かれて仮設住宅に移ると、もともと全く顔の見えない自治会の人たちが同じところに寄せられてしまう。そうした中では、コミュニティの問題や家庭の問題が出てくるのです。

○加藤

それでも仮設住宅に移ってからは、そこにしばらく住まなくてはいけないとなると、だんだんいい方向にいくものですか。

本当に求めているものか、今必要なものか、そこを見極めた上でアクションを起こす

○柄谷

最初は正直大変だったのです。仮設住宅の各棟の代表を決めて集まったときに、役所や行政の批判がすごかった。集会所がないじゃないか、掲示板もないし放送施設もない、また津波が来たらど

うするんだ、と。避難所では、どこでもいいから空間をと、皆さんそうおっしゃっていたのですけれども、いざ入ってみると、何だここはということで、皆さん最初は不安もあって、いろいろな不平不満が出ていました。

そうした雰囲気を変えるきっかけになったのが、私がたまたま持っていった花火だったのです。私がお世話になっている一家族分しか持っていかなかったのですが、やり始めたら、40~50人の子供たちがわあっと出てきて。そのときに、その自治会の方や住民の人たちが、こんなに子供がいるんだということに初めて気づくのです。それを一つのきっかけに、学校にもまだ行けない子供たちに夏休みの思い出をつくってあげたいという気持ちが出てきたのですね。

もう一つのきっかけは、女性たちです。集会所がなかったら、テントを支援者の人に借りて集会所にする。テントでみんなで手芸をしたり、流されずに残った七夕の山車に協力して飾り付けをしたり、お茶飲み会をしたりとか、お姉さんやお母さん方のコミュニティが自然にできてきて、その明るい声が聞こえるようになってくる。そこに支援者の人も入ってきて、支援する窓口ができてくる。さらに、そこに男性陣が手伝うかということで加わり、執行部ができる。若い人を立てて、その人たちを年長者がサポートして自治会をつくるという形もできてきたのです。



行政ばかりに頼らず、地元建設業者、自治会、高校生らと共に掲示板を製作・設置

それに加えて、地元の建設業者の方がとても協力的で、例えば掲示板一つでも、建設業者の方にお問い合わせすると、がれきの中から木材を持ってきてくれるわけです。仮設住宅には腕のいい大工さんが大勢いるので、ご協力をお願いすれば素晴らしいものができるのです。そうして、地元の建設業者の人たちも巻き込んだりしながら、仮設住宅はいい方向に進んでいきましたね。

それで、去年の12月28日には集会所もできたのです。役所や県の人たちの手はもう借りられないということで、お世話になっている外部団体とリース会社の人たちにご協力いただいて、とても立派な集会所ができたのです。

ただ、私は仮設住宅の皆さんが集会所が欲しいと最初に言ったときには、すぐには動かなかったのです。本当に皆さんが欲しいと思って、自分たちで何をやるのかというのを必ず私は待つようにして、本当に要るんだなというときにつなぐことにしているのです。そういう中で、地元の建設業者の方とか地元の方々、被災された方々の力もあって、年末年始も非常にいい雰囲気です皆さん過ごせたと思います。

○加藤

本当に欲しいとなったときに初めてアクションを起こすということですが、それは柄谷先生ご自身の感性なのか、これまでのいろいろな震災の経験によるものなのか、ちょっと気になったのですが。

○ 柄谷

今回の災害の新しさは多分そこだと思っています。外部の支援者の方々のご相談にも乗っているのですけれども、そろそろ被災地の方々が自分たちの足で立って、何かやろうとするような支援の仕方を考えましようと言っているのです。被災直後には生きるための物資が必要。しかしながら、一定の時期を過ぎると、物資があることによって、むしろ被災された方々の士気が下がるのだということを、厳しいようですが説明するのです。

手厚いサービスを皆が受けられるならそれでいいのですが、まずそれは難しいと思うのです。しかも、長期にこれだけの広域となると、忘れられたり、地域によって大きな差が出たりすると思うのです。これから外部の支援者は減っていくわけですから、外から受けられるサービスを少しずつ自分たちでやってみよう、つくってみよう、自分たちでとってこよう、自分たちで売ってみようということをやらないと。地元の人たちが主役なのですから。彼らがそこに残ると決めて、彼らがそこで自分たちの地域を何とかすると決めていかないと、地域の再建はあり得ないと思うのです。

そういう意味で、仮設住宅についても、皆さんが本当に必要なタイミングに応じて、私ができることはつなぐことだけなので、待つ。「それが欲しいの？ じゃあ」とやれば、もしかすると早いかもしれないのですけれど、ちょっと待てよと。こっちの人はこう言っているけれども、こっちの人の話も聞いてみようかなとか、それはインフラとしてつくっても、今はまだ使わないのではないとか、そこをきちんと考えたいですね。

ほかの仮設住宅で、役所が早い時期に立派な集会所をつくったところもあるのですが、そこはまだ有効に使われていないのです。まだルールもない、組織もない段階では集会所に鍵をかけておくしかないのです。

ここの仮設住宅でも集会所はまだ必要ないと思っていたのですが、あったほうがいいという時期が来たので、それじゃあということでお手伝いをしました。本当に必要なときにつくったので、み

んながそれを感謝して使うのですね。集会所でおもちをついて、支援してくれた方たちをお呼びして振る舞う。そんなふうに支援してくれた方たちに今度はお返しをするということを、集会所ができたことを契機にみんなでやり始めています。

○ 加藤

それまで救援物資や支援を受けてきた被災者の方々が、少なからず感謝の気持ちを逆に与えられるようになるということは、ものすごく気持ちとしては満たされますよね。

○ 柄谷

それは感服します。皆さん、いろいろなものをいただいたり、ご支援をいただいていることに対して言うのは、「これ、どうやって返そうか」ということなのです。いつか返さないと申しわけないという気持ちでいっぱいなのです。それを表現したくても、じゃあ何か買って返すということもなかなか厳しい状況の中で、自分たちで何かイベントをするという機会に呼んで、おもちをついてご馳走してあげようとか、お礼をみんなで言おうとか。あと、子供たちにもちゃんとお礼を言わせようと、子供たちの教育にもなるということを少しずつ今やりはじめています。

多分こういうお返しをするということ、あるいは、救援物資などがなくなってから仮設住宅の皆さんが何をしたかという、買い物です。自分で選んで物を買うのです。これは非日常から少し



ずつ日常に戻っていく過程の中で、人として人に感謝の気持ちを伝えとか、自分で何かをすることへの喜びが少しずつ出てきていると思うのです。私は、こういうことも人が再建していく上でとても重要なプロセスだと思っています。

被災地に一番必要なのは仕事 仕事こそが被災地に留まる意義を生み出す

○加藤

被災地の皆さんは、今は仮設住宅に移られて、そこで生活をされているわけですが、今までお仕事をされていたそこのお父さんなりお母さんなりという働き手の方たちの就業状況は今はどうなっているのですか。

○柄谷

それが今一番の問題だと思っています。自治会などをやっている40代、50代の男性たちも、自治会の皆さんに感謝されるし、重要なことだということで一生懸命やっているのですが、皆さん仕事がない状況で、そこはすごく私も心配をしています。陸前高田市には大きな産業とか工業地帯がないですし、工場も少ない。もともと仕事が少ない中でこういう事態になってしまっていて、今は本当に仕事がない状況です。

いろいろな企業の人に話はしてみましたけれども、やはり営利企業ですから、復興のためとはいえ、一時的にはできるけれども、そこに仕事の拠点を置くには非常にコストもかかってしまうということで、外部の企業の誘致にも今のところなかなか結びついていません。

仕事や雇用の機会がないため、陸前高田市を一時的にか恒久的にかは分かりませんが、出て行く人も少なくありません。早い人は、昨年12月に復興計画が出るまでに出て行っています。ですから、いざ再建、復興といったときに、これからの一番大きな課題としては、そこに留まる意義とかメリット。そこが好きだから、というだけではやはり難しいと思うのです。家族が生活してい

なくてはいけない、だけど働き手に仕事がない、これがおそらく一番大きな課題と言ってもいいと思います。ここにずっと残る人たちがここでどうやって生計を立てていくかということ、本当にそれは大きな課題なのです。

○加藤

今のお話を伺っていると、残った人たちというのは、もちろん陸前高田市が大好きで、自分が何とかしてやろうという人もその中にはいらっしゃると思うのですが、そうした方々に仕事をというのは難しいことなのでしょうか。新しい雇用を生むような動きはあるのですか。

一般の人たちがインフラを真剣に考える 今こそ土木の時代、土木復権の好機

○柄谷

復興のインフラ整備も含めてかなり大胆なことをやろうとしているところもあります。例えばメガソーラーといったものを持ってくるとか、復興を残すためのメモリアルパークをつくるとかさまざまな計画があります。そうした中で雇用が生まれると期待しています。

例えば東京の企業など、多くの外部の方々がプロポーザルを持って役所に来られるそうです。そんな中で、地元の地域リーダーの人たちというのは、建設会社の人もそうですけれども、もちろん外部の方にいろいろな力とか知恵を借りることは必要と考えていて、外部との交流も盛んになっているのですが、実際にやるのは自分たちだということではやはり軸として持っているのです。できるだけ地元の人たちが一緒になって議論できて、新しい形の農業や漁業、観光など何とか仕事を生み出す仕掛けをつくらうとはされています。その動きはあるので、そこにすごく期待したいですし、私もそういう方たちと連携しながら、どうしていけばいいのかということを考えているところではあります。

地元にいる人たちもそうやって自分たちで考え

るし、また、外部にいる、例えばゼネコンさんと
かそういった方々も、もちろん最新の技術などこ
れまでのいろいろな蓄積を大いに被災地に生かし
ていただきたい。その一方で、やはり自分たちの
やっていることは下支えであり、あくまでも被災
地の人たちが主役なんだという気持ちは、私も含
めてどこかに持っておかないといけないと思って
います。

○加藤

よく分かりました。やはり土木というのは「人」
ですから、久々に底の深い土木だなという気がし
ました。そこを何とかするというのが、そもそも
土木屋。土木屋というと、得てして何か物をつく
ってというような感じになるのですけれども。

○柄谷

土木というと、一般の方はそうしたイメージを
持たれていると思うのですが、今こそ、そうじゃ
ないということを認識していただくいい機会だ
と思うのです。

以前にもシンポジウムをさせていただいたとき
に言ったのですが、地元の人たちは結構み
んなで集まって、復興計画や地盤のこととか堤防
のことなどをいろいろと議論しているのです。そ
こに、土木の人たちに来ていただきたいのです。

行政の方にその話をしたら、それは難しいとお
っしゃる。でも、彼らはこれをつくってくれとか
そんなことは言わないのです。「こんな堤防つく
りたいんだけど、これって土木でできるのか」と
か、そうした話なのです。自分の思い描いたイン
フラが技術的に可能なかどうか、土木技術者に
そこを答えてほしい。それだけなのです。

○加藤

それはとてもいいことです。そういうところ
に土木技術者の本来の使命があるのかも知れませ
ん。

○柄谷

実際、すごく素朴なことを聞かれるわけです。
彼らは別にそれを高田につくりたいとかそんなこ
とを求めているわけでもない。ただ単に自分たち
がこういう状況になって初めて考えるインフラの

ことについて、素朴な疑問をいろいろと言うわけ
です。

これまで大事にしてきたものが全てなくなった
キャンパスに絵を描く、その中で土木技術者が関
われる機会というものがとても貴重だと思います。
特に、若い人たちに、住民が本当に必要とし
ているもの、つくってほしいものを、一つ一つ形
にして行くということを経験してほしいと思いま
す。

そうした交流を通して新しい発見や新しい技術
につなげることもできる好機ですし、互いに成長
できるいい機会だと思うので、是非来ていただき
たいのです。

○加藤

本当ですね。一般の人たちがそれほどモチベ
ーション高くインフラのことを考えるなんて、そう
そうあることではないですから。普通だったら、
われわれ土木屋がいくら頑張っても耳を貸しても
らえないのに、今は渴望されているというのは、
大変なチャンスですね。

○柄谷

そうです。土木に携わるみなさんの知恵を思う
存分出していただいて、それを技術開発につなげ
て行く。そして今回の経験を、首都直下、東海、
東南海、南海地震など今後想定されている次の災
害に生かしていかなければならないと思います。

○加藤

今こそ土木のイメージを変える、土木復権の時
代ですね。

柄谷先生には、震災後から被災地を見てこられ
た貴重な体験とご自身の土木・防災研究者として
の思いをお話しいただきました。

土木は「人」であり、土木技術者は今、何を求
められているのか、何をしなければならないのか。
われわれ土木に携わる者へのメッセージとして、
読者の皆様と一緒に考えていきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

(対談実施日：平成24年 1 月19日)